

# 信州に根差して

—モノ造りの原動力

対談：近江 栄  
宮本忠長

近江● この対談では宮本忠長さんの全体像をいろいろお伺いしていこうと思います。私の聞いているエピソードで有名な話は、給料の安いときに屋台を引っ張って稼いでいたというような(笑)、それこそ偉人伝みたいな話があるわけで、そこまでやってでもアーキテクトになりたかった、その原動力は何だったんだろうか、というようなことからお伺いしたいと思うのですが……。

宮本● 原動力というお言葉なんですけれど、一番感謝もしていますし、一番大きく影響をいただいたのは佐藤武夫先生だったと思います。

原動力というのは、とにかくバカになって建築をやれるというのですかね。たとえば、自分が大学を出たとか、あるいは、どこどこを出たというようなことに全く関係なく、ただ建築のなかにとび込めた。バカになって、普段はそばへもいくことのできないような大先輩の皆さんと、それから、学生時代は佐藤先生という私どもはそばへもお近づきできなかったような犬先生と一緒に、たとえばテーブルを囲み、あるいは製図板の上で、お互いに鉛筆を持ってディスカッションをやれるとか、先生が、キミその鉛筆を貸したまえなんていわれて鉛筆を奪い取って先生が線を引かれるような……感激なんです。そんなことが非常にありがたかったですね。

近江● やっぱり、アーキテクトを目指したというのは、お父さまの影響……。

宮本● ええ。父親が小さな建築事務所をやっておりまして、父親の実家は施工会社——設計施工なんです。祖父は明治元年生まれの棟梁で、新潟県の板倉村から出てくるわけです。いま思えば青雲の志を抱いて、農家の次男だったものですから農業を捨てて建築家になるというようなことで棟梁に弟子入りするのです。そして、伝え聞いたところによりますと、その頃は、いまでいう設計ですか、とにかく建築をやってみようという強い意志があった。須坂というのはちょうど峠を越えますと板倉村と経済的に非常に近いわけです。雪の多い板倉村ですから冬は仕事がないのです。須坂は製糸工業が盛んで非常に華やかな場所でしたから、産業の中心で、人々が集まるんですね。須坂へきて製糸工場のいろんな仕事をして、一応独立して棟梁として認められ、それから設計施工でやっていて、晩年は施工一本になってしまったんです。長男は築地の工手学校を出て、宮本組という建設会社のあとをとるのです。その様なわけで父親は早稲田の工手学校を出

て通信省へ奉職しまして、次男なんですと通信省にいるつもりでいたらしいんです。山口文象先生と通信省で同期なんです。うちのおやじは工手学校ですから製図工で入り、2人でたいへん親密に、先生がお亡くなりになるまでおつき合いがありましたけれどもね。そのときに、うちの祖父が、たまたま長野の中央郵便局の工事を、いまでいう大手6社ぐらいで請けてとるんですね。その工事の途中で、当時の乗合タクシーで、木の橋の上でむこうから荷馬車がきて、タクシーのほうバックをして千曲川へ車ごと落っこちて、工事途中で死んじゃうんです。それで、兄の仕事を手伝わなければいかんというので通信省をやめて須坂へ帰って、しばらく一緒にやっていたんですね。ところが、どうしても設計のほうが好きというので、昭和8年頃、事務所を須坂で開くわけです。そんなことがありまして、どうも、私は設計のほうをやっていくべきじゃないかなという気持ちが……。

近江● もう、自分の気持ちのなかに宿命づけられたというか……。

宮本● 中学の2、3年ぐらいからありましたですね。

近江● だけど、こだわるようですが屋台を引っ張ったというのは本当の話ですか。

宮本● それは、ほんとに恥ずかしい話なんですけど。昭和26、7年頃、当時、佐藤事務所毎晩毎晩残業をします。正直にいうと事務所も苦しい時代なんです。私の場合は下宿しておりました。

近江● アルバイトはやる気ならあったんですか。

宮本● 図面を書いたり個人的に少しずつ皆さんはやっていました。ところが、私はアルバイトをしたくてもお金になる図面が書けないわけです。豪徳寺に下宿をしていて、夜残業をして、そこでおソバを食べたり一杯飲んだりして下宿へ帰るわけですね。だんだんその払いがたまっちゃったんです。そのくらいのお金ですから、田舎へ電話をすればすぐなんとかなるんですけど、私の場合は、父親からしますと、長男ですからできれば佐藤先生のところを1年ぐらいで帰ってきてほしいという気持ちがあるわけですね。自分は年をとっていきます。で、そのソバ屋の主人がとにかく借金だけは払えというわけです。それは払います、と。ではどうする？というので、屋台を引っ張るかという話になったんです。たまたまその店にハルちゃんという男の従業員がいるんですよ。それは昼間からいますから、ハルちゃんと2人で引っ張れというので、事務所を終わってから引っ張りましょうというので、

9時か10時頃終わって帰ってきました。豪徳寺と経堂の間を引っ張るんですよ。そんなことは初めは誰にもいわなかったんです。そうしたら、事務所の池田さんという人が近くに下宿をしていて、ホロ酔い機嫌で“オイ、ソバ屋、ラーメンー丁”なんて入ってきたんです。こっちは“ハイいらっしやいませ”なんていって、腰掛を持っていってフッと顔を見たら池田さん(笑)。えらいことになっちゃったなァと思ひましてね。とにかく、池田さん、カンベンして下さい、これは先生には絶対に内緒にして下さいと。

ところが、そういう話はすぐわかりましてね、2、3日たつて、佐藤先生に呼ばれました。いったら、“キミ、お小遣いどのくらい足りないかね”なんていわれてね。“先生、申しわけありません”と謝った。そうしたら、いくらになるといわれて、なんでも、当時の金で1ヵ月3,000円ぐらいにしかならないんですよ。

近江● 給料は7、8,000円でしょう。

宮本● 6,000円ぐらいですから、わりとよかったです。実は3,000円ぐらい足りないんだという話をしたら、おソバはすぐやめなさい、というのです。ぼくの気持が許さないというか、申しわけないというのです。給料を上げるわけにいかないから、足りない分はぼくのポケットマネーで給料からキミに3,000円だけあげる、と。さあ、そうなっちゃったら、切ないような、申しわけない気持ちで、ほんとによくないことをしたと思ひましてね。それから、先生はそのとき、屋台を引っ張る時間があるんだしたら、これで建築の勉強ができるだろうといわれましてね。ほんとに涙が出るほど恐縮しちゃったですね。

近江● たしか、私たちが25、6年という月給が7,000円でした。大学の助手時代はね、6,000円と似たようなものです。食えなくてほんとにすごい時代でしたね。

宮本● そのとき、佐藤先生が、3,000円足りないか、じゃあ3,000円出す、そのかわりアルバイトをするなどというのです。せつかく事務所で貧乏して苦勞しているんだから、建築を一所懸命勉強しろ、というんですね。なかなか、そういうふうについて下さる先生というのは……いまはできないと思ひますね。

近江● 佐藤先生も書いておられましたけど、コンペがあったりすると一緒に徹夜をしてやったというようなことが。

宮本● そうです。最後にパースになりますね。佐藤先生のパースというのは定評がある。私がいつもパースのハンドになるわけです。私がそばで絵具をといたり、はじめはやっているわけですね。そのうちに佐藤先生が、キミ、ここまで描け、ここまでやれといわれ、いつからですかね、だいぶたってから逆転して、先生がそばにいて、キミおなかがすいたろうなんていってお餅を焼いてくれたり(笑)。私もお餅を食べたりパースを描いたりしたんです。最後にフィニッシュを先生にひと描きしてもらったわけですね。そういう点では恵まられま

たね。

近江● 結局、宮本さんが幸せだったのは、自分の尊敬する先生のそばで一緒に仕事できたという。つまり、大組織でない時代の佐藤事務所のよき師弟関係のなかで育まれた、ということじゃないですかね。

宮本● そうですね。

## 長野に帰って

近江● それで、実際に長野へ帰ってご覧になって、東京で13年もやってこられて、いざ帰って見たらアリヤリヤというようなことはどんなことでしたか。期待はずれというか現実の厳しさというか……。

宮本● 現実にくつかありましてね。まず1つは、佐藤事務所という舞台は、これは日本のトップのレベルですから、やる建物の規模が大きいんですね。それから、たとえば、木造なんかないわけですね。ところが、長野へ帰りましたら、まず、木造建築なんです。図面も鉄筋コンクリートはないわけです。当時、長野市内のような県庁所在地は別ですが、ちょっとした町、市の段階では鉄筋の建物が1つもない時代です。みんな木造です。しかも、おやじのあとを手伝わなくちゃいけませんから、そうすると木造の仕事が多いわけです。例えば、200年ぐらいたちましたお寺の、倒れかかった本堂を上へあげて修復する仕事とか……解体修理、木造専門みたいでした。

近江● 佐藤事務所での経験がすぐには活かせないわけですね。

宮本● しかし、いま考えますと、そのとき木造を勉強できてよかったと思います。古い建物を実測しましてね。お寺の修復なんて実測ですからね。社寺建築なんて知識はゼロでした。いまでもたいしたことはありませんけど。実測できたことはありがたいですね。木造がいまでも好きなのはそういうせいだと思います。

近江● 仕事をしていらっしやって、ご自分の立場は中央の大きな組織事務所から地方の事務所になったわけで、地方の事務所の立場としてみたときの問題点……大手事務所との競合など、問題点というか、要するに、地方で生きようとすると建築家にとって少し問題があるとすれば、どんなことでしょうか。

宮本● 私、地方へ帰りまして不安だったことは、木造とか鉄筋とか関係なく、建築のまとめ方、たとえば現場監理のしかたとか、特に佐藤先生のいわれたことが支えになっているんですけど、監理は最後の1分の1の設計だ、設計図の1分の1だから監理は力を入れてやりたまえ、なんて先生にいわれました。そういった意味がわかってくと同時に、こんなことをやっていいのかな、もっと監理のやり方が違うんじゃないかな、と逆に不安になってくるんですね。なんとかして大型組織の事務所の持っている監理のシステムみたいなもの——技術監理の点にもっと力を入れなくちゃいけないので

はないか、という感じがありましたね。それが悩みでした。たまたま、日建設計さんが長野の信用金庫の本店の設計をおやりになることになったんです。信金さんとは、私も、地元にて懇意だったものですから、うちなんかが一緒に設計をするような力はまだありませんし、うちの金井君というとても熱心な男を日建の社員になってもらいまして、内地留学で信金の本店の現場を2年間お手伝いしたんです。

近江● 彼はそういう幸せな経験もしているんですか。

宮本● また、日建の紫藤さんという立派な現場主任が常駐されていて、その下へ日建の社員の一員で入っておいりましたので、そういう点は日建さんにも非常に感謝しているんですけど、信金さんも喜んでくれました。あとのメンテナンスは地元で金井君ができるわけですね。ですから、その体験はうちのひとつの監理のやり方になって事務所自体とても力がつきましたね。だから、やっぱり、胸を貸してくれた日建さんも偉いと思いますし、胸を借りる姿勢も大事だと思いましたね。

近江● もう1つこういうことを伺いたいなと思っていましたのは、長野市あたりの大都市になると中央コンプレックスはないのかなァ……たとえば、茨城県の古河市で公民館のコンペがあったんです。総工費3億足らず。それが指名コンペだった。佐藤(武)さんと坂倉さんと岡さん、それとあと地元が3社。たまたまこのコンペは村松先生やなんかと一緒に審査に携わった。地方の小さな町にできる公民館の設計をやるのに、地元の事務所の出してくる案が、すべて“ここに公民館がある”という、広々とした階段があって、まるで宮殿みたいな公民館の案が圧倒的に多いんです。つまり、地方の人たちの期待しているものと、こちらの提案しようとする町並みに調和させようとしたもののギャップなんかに苦労されたことはないですか。

宮本● それはやはりありますね。普通の仕事でも、施主とのやりとりで、地方にいますと、たとえば、自分たちの周りにある建物なり町並みはもう古いもんだ、という意識があるんですね。

近江● 古いものはダメだ、と。

宮本● ダメだから、東京にあるものをやれとか、雑誌に出る、ちょっと形の奇抜なものをやらなくちゃいけない、という建築士も多いわけですね。

近江● そうでしょう。オーナーサイドからもそういう要求も…。

宮本● そういう要求も出ますね。

近江● 中央コンプレックスみたいな……。

宮本● 私はいつも、足もとに素材はあるじゃないか、というんですけど、そうすると宮本は古い、と(笑)。もう、私の場合は、長野では古い作家なんですよ。いわゆる前衛じゃないんです。

近江● 前衛ではないけれども、古いというつかまえ方を地方の人はしてしまう、という奇妙なコンプレックスみたいな…。ですから、そのときも、佐藤武夫と坂倉の案が断然よかった

んですよ。いずれも町並みにスポッと入って、勾配屋根がついて、さりげなくおさめている。2つの案のどっちにしようかと迷った結果、敷地利用の巧みさで佐藤案になりましたがね。そういうのを見ていて、地方で設計をする人たちはちょっと違った感覚で、力み返っているようなところがあるわけですね。だから、おそらく、宮本さんみたいな立場で見ていると、やはり、古いといわれちゃうことになっちゃうのじゃないね。

宮本● 特に、そういう傾向が新しい若い人に多いんですね。私なんか、どうも、たとえば屋根のある建築をつくりますと、あれは設計じゃないとか、あんなものは考えなくても誰でもできるとか、施主からいわれちゃう場合があるんですね。しかし最近、地方の時代といわれまして、それなりの意味で一部のリーダーはわかってくださってはきておりますね。

近江● そうですか。ようやく、という感じですか。

宮本● ようやくそういう感じがします。私の場合、いままで、御縁のあった施主の方々の仕事をしていたものですから総じて仕事はわりと少ないんですけど、その意味では、あそこへ頼めばわりと古いものを設計してくれるからいいんだ、というお施主のほうが……(笑)。

## 土地・自然・人間

近江● 同じ長野県内でも県北、県南で地域性がありますよね。たとえば、雪を落とさない設計を野沢の温泉でやられて、ヒンシュクを買ったというような話なんですけれど。

宮本● やっぱり、野沢温泉の場合あたりは小さい村で、温泉町ですから、雪で非常に苦労しているのです。木造が密集して多いわけですね。屋根の雪は必ずおろすもんだという概念があるんです。雪おろしというのは非常にお金もかかるわけですね。雪おろしをしないようにという、それが強いんですね。勾配を強くすると雪おろしをしないでいい、という先入観があるんです。私の場合には、たまたまスキー場のなかでしたから、急勾配にして雪を落とさないで、かまくらみたいに、雪をひとつの造形にして、それがまた1つの断熱層にもなりますので、中の博物館はうまくおさまると思ってそういう設計をしたんです。そうしたら、雪が落ちないというわけですね。

近江● あれはどうして落ちないんだ、と。

宮本● あれは設計ミスじゃないかと。そういうことがありますね。現実には、最近、屋根を葺き替えますとそういう意見が強いんです。今度はステンレスのものにして……。

近江● 落とせ、と。

宮本● それで、屋根を葺き替えます。そうしたら今度は落ちるんですけど、落ちていま困っていますのは、窓などへ、いっぺんに落雪がかかって非常に困っているんです。いまにして雪は落ちないほうがよかった、とっている。

近江● なるほど。ただ、積雪に耐えさせるためには、さらにもう一層分の荷重を最初から考えなければいけないとか…。

宮本● そのくらいですね。最近やりました飯山の伝統産業会館を置き屋根構造にしました。土蔵の置き屋根ですね。あれもいろいろ考えたんですが、雪は載せておいたほうがいいのか、建設委員会でも全員の意見で……。

近江● そこでは通ったわけですか。

宮本● 野沢と飯山では、距離で4キロぐらいしか離れておりませんが、雪に対する感覚が違うのです。野沢のほうの雪はわりかし湿っぽい雪なんです。飯山の雪は、野沢と異って寒気が強いので凍るんですね。それで、雪を水でとかしてもダメだし、載せておくのが一番いいんじゃないかということになりまして、土蔵の置き屋根にしたんですね。土蔵の置き屋根はツララができないんです。小屋裏と外とだいたい一緒になりますから。



宮本忠長氏



近江栄氏(日本大学教授)

近江● 庇を出さない。

宮本● 庇が出ていまして、普通はツララができるんですが、置き屋根で庇を出しますと、躯体までの温度が同じなので雪が載っていてもそんなにとけませんので、ツララにならないんです。ツララが落ちて危険というのは多いんです。置き屋根というのはさすがに生活の知恵ですね。ですから、生きた資料・素材がいっぱい足もとにある、という感じを飯山なんかでは持ちましたけどね。ちょっと離れると価値観が変わりますね。

近江● 宮本さんの事務所では、職人、工人を非常に大事にされていますね？

宮本● これはありがたいと思っているんですけどね。職人さんに私も教えられるところがたくさんありました。現場へ出ていろいろやっておりますと、職方の連中は実際を知っているんですね。監督さんここはこうやったほうがいいのか、とか、ここはこのほうがいいのか、2人ででき上がるんですよ。

近江● 同県人だから親近感も違うのかな(笑)。

宮本● 同じ環境ですからね。家庭的にも知ってるわけですよ。どういう人でどういう生活をしているかがわかりますから、監督も職人もないんですね。とってもありがたいですね。

近江● 人間関係も濃密になってくるということですか。

宮本● そうですね。それは東京からですとできませんね。

近江● 切れちゃうから。職人も親密な感じはなくなっちゃう

しね。

宮本● 職人の皆さんが、彼は監督さんなんだ、とそばへもいれないわけですね。

近江● うさんくさいわけですね。

宮本● ですから、話す機会もあまりないですね。地元においてありがたいのは、職人さんと一緒に仕事ができることですね。

近江● 職人さんの話ですが、今度、金沢で学会があって、大谷さんの今度の学会賞のライブラリーセンターを見てきたんです。そうしたら、あれも宮本さんのところと同じくらい大谷さんがあつくなってやったらいいんですよ。センターの裏側の大きな壁面に、「P S コンクリート誰々、左官誰々」と職方の名前を金属プレートに書いて打込んでありましたよ。あれは博物館でもやられたほうがいいですね。

宮本● そうですね、ありがとうございます。

## 信州のモノ造り屋として

近江● それから、今は教育に携わっていらっしゃるわけですね。だいたい日本の大学では、理工学部とか工学部に建築学科があって、あまりに多目的で、卒業生の6割は現場に行くけれども、あとはデザイナーになるのが1割5分ぐらいでしょうか、あとは構造だ設備だ何だといろいろ多目的すぎますね。そういう多目的すぎる教育の現場に非常勤としていかれるのでしょうか、教えていらっしゃるって何か不都合を感じられることはありますか。

宮本● 4月から信大の工学部に建築科ができて、1回生が3年生なんです。ちょうど、設計製図の専門課程に入ってきました。設計製図の講座を与えられまして学校へ入っているのです。初めて学生と接しまして、まだ、たとえば課題は1つ2つぐらいしかこなしていないんです。34名ぐらいのクラスですが、長野県の出身者が6名ぐらいで、ほとんど、東京とか中京方面からきているのです。

近江● エッ。信大は入学試験に特色があるからかしら。

宮本● 信大経済学部は特徴を持ってやられたんですが、工学部はまだないようです。信州大学だから信州人が多いとは限らないのですが、地方に住みたいの若者と同じで、長野県の若い人たちは東京へいきたいんですね。ですから、信州大学がいい悪いじゃなくて、とにかく東京へ行って遊学したいというので……。

近江● 遊びたいんですね、東京へ行って。

宮本● カッコイイのかもしれませんが、ちょっと、意外でした。信州大学の学生は、1つは、非常に純粋というか、純朴で、1回生ですからあまり刺激がありません。自分たちは何をやっていいか模索中と言ったところでしょうか。一教師として責任を感じますね。

近江● 今年学会で聞いてきた新語ですが、音痴という言葉があるでしょう、それじゃなくて、空間痴というのがあって、

宮本● たしかにありますね。

近江● 空間がわからない。ぼくは、そういう例として、よく話しますが、東大の教養学科を出て、それから建築をやりたくてうちの建築の3年生に編入してきたんです。ところが、教養学科では図学をやっていないんです。たまたまぼくはそのとき図学を担当で、その人に図学を教えたんですけれども、なんとしても合格点に届かない。図学というのは、まさに、空間を平面図形にしたり立体図形に起こしたりでしょう。そういうことになるちょっと頭の働きが違うわけです。ところが、その人は、学校を出てから国家公務員の上級試験を取って建設省に入って、途中で都市計画の勉強で留学して帰って役所で都市計画に携っている。特別、空間をつくったりなんかすることには携わらないんです。だけど、行政官としてもものすごく有能なんです。ですから、建築学科に入る人の何パーセントかは造形力がいいやつは、多少数学ができなくても入れるとか、信大ではそういうことをしませんが建築学科にいい学生は入ってこない。さて、これから信大の先生として建築教育はなかなか多難のようですけども、おそらく、宮本さんぐらい幸せな師弟関係—先生と弟子というかな—誰もが学校にいったから先生と密着できたなんてことはないわけで、特に大学の尊敬する先生のところまで直接徹夜と一緒に仕事をするというような、そういう体験を経るといえるのは、そう数はないと思います。だから、毎年そんなできの良い人がいちゃたいへんだろけれども、これはと思うような学生さんがきつと出てくるでしょうから、そういう体験が活かされることを期待しておりますよ。せっかく信州育ちで信州で建築家を養成できるようになったんだから……。

長野の地に根をおろしたデザインをやっていらっしゃるわけですが、学生たちというのは常に東京志向、中央志向で、また、最先端のものばかりをわけもわからずに見たがる。いま、それこそモダニズム(近代主義)がいき詰ったといわれて、ポスト・モダニズムで、ぼくらの世代の受けた教育からするとこれが建築かと思うようなものが出ている現代の状況を、宮本さんはどういうふうに受け取っていらっしゃいますか。

宮本● やっぱり、建築の設計する姿勢みたいなものは、自分の考えている内側のものを赤裸々に出していくべきじゃないかなという気がするんです。ですから、あまりいろんな……。

近江● 知識や頭で操作するものではない……。

宮本● あんまり知識と頭と映像からきますと、どこかモノ真似もしたくなりますし、自分も不安になってきますけど、自分の建築というのは、たとえ時代遅れであれ、あるいは、時代からはずれていようが、自分はこういうふうにモノを考えてこれをつくっていくんだという、なんか、つくっていく姿勢みたいなものを設計する1つ1つに出していくかなくちゃいけないのではないか、という気がするんです。

近江● その間に、当然、いろんな時代の影響とかそういうものがいつの間にか体内化しているのだろうと思いますけどね。

宮本● はい。ですから、たとえば、ポスト・モダニズムということが、言葉では私も私なりにわかる感じがするんですけど、じゃあ、私の建築はどうかといわれますと、言葉ではわかってても建築で表現するのは自分のモノでありたいと思います。あんまり自分という意識で独走していっちゃいけないのではないか。いつも、建築というのは脇役のような気がするんですけどね。しかし、脇役でも……。

近江● 佐藤先生もそれをよくおっしゃっていましたね。独創と独善を勘違いしたり建築家は主役であってはならないと。村野先生が、99%と1%という話をされるでしょう。

宮本● 私、村野先生の99%、1%の意味がたいへん僭越ですけどもこの頃やっと少しわかってきたように思えます。それは、正月に私の義弟と碁を打ったんです。彼は碁キチでして6段ぐらいなんです。どうせ兄貴はヘタなんだから正目おいて、きょうは1目だけ私に勝たせてくれ、兄貴は黒を持つのだから1目だけ負けろというわけです。じゃあ1目だけ勝たしてやるというわけで、9目並べて打っていったんです。最後に数えていきましたら、ほんとに1目むこうが勝ったんです。私は1目負けたわけです。ところが、打っていながら、とても気持ちいいんです。自分なりに、ヘタなりにとっても満足した碁が打てるんですね。負けても嬉しいんです。ほんとにいい碁を打たしてもらったナという感じなんです。それがどうも、村野先生のおっしゃることじゃないかなと、体験としておぼろげながらわかったんですけどね。碁と設計とは無関係でしょうけど、何か似てははいまいか。そんな実感がありました。特に住宅などの設計をしていて最近思いますが、やはり、住宅を設計するときに、私はプロですから一応白を持つ。お施主さんは黒を持つ。お施主さんは黒ですから9目おいてくださって結構です。そのときに私が大勝しちゃいけないと思ったんです。でも、最後は負けちゃいけません……。

近江● 最後の止めの一発は……。

宮本● やはり勝たなくちゃいけないのですが、勝たしてもらうという気持ですね。ただ、大勝しちゃいけないんだという感じが、どうも私の設計の姿勢に大事じゃないか、という体験を最近少しずつわかってきました。佐藤先生の“建築は脇役なんだ”という言葉はそういうところにあるのかなという……どうでしょうか。

近江● とにかく、私のような立場で日本全国的に見渡して—全部を知っているわけではもちろんありませんけれども—いろいろなジャーナリズムに出てくる地方の建築家という人を数えあげても、宮本さんを含めて10本の指にのるかどうかし、残念ながらいまのところはぼくは存じ上げないんですけども、平坦な道じゃないと思うんですよね。これからたぶんたいへんだろと思いますが、せっかく博物館で学会賞というひとつのスプリングボードに立たれたわけですから、将来の発展を期待しております。頑張ってください。

宮本● ありがとうございます。